Journal of Inclusive Education

Printed 2017.0331
Online ISSN: 2189-9185
Published by Asian Society of Human Services

"Manbou maru"
Megumi MIYACHIKA

March 2017
VOL. 2

Asian Society of Human Services

SHORT PAPER

肢体不自由者に対する Microaggression に関する事例的検討
―発話の有無の選択的調整に焦点を当てて―

Microaggression Experienced by Individual with Physical Disability: A Case Study

藤村 励子 [1] (Reiko FUJIMURA), 郷右近 歩 [2] (Ayumu GOUKON)
野口 和人 [1] (Kazuhito NOGUCHI)

1) 東北大学大学院教育学研究科
(Graduate School of Education, Tohoku University)
2) 三重大学教育学部
(Faculty of Education, Mie University)

＜Key-words＞
肢体不自由者，Microaggression，態度，ステレオタイプ
(individual with physical disability, Microaggression, attitude, stereotype)

reiko.fujimura.s8@dc.tohoku.ac.jp（藤村 励子）
Journal of Inclusive Education, 2017, 2:47-55. © 2017 Asian Society of Human Services

Received
2016 / 12 / 19

Revised
2017 / 1 / 15

Accepted
2017 / 1 / 17

Published
2017 / 3 / 31

ABSTRACT

Microaggression とは、「日々の言語的、非言語的、環境的な軽蔑、冷遇、侮蔑であり、意図的かどうかにかかわらず、ただ周縁化されたグループのメンバーであるということだけで、対象となる人々に対して敵対的、中傷的、否定的なメッセージを送ること（Sue, 2010）」である。肢体不自由者の中には、障害による表情や反応の乏しさから、かかわり手の差別的行動に対して不快感を示すことの難しい者が存在する。そのため、差別的行動があったとしても、問題が潜在化しやすい傾向にあると考えられる。本研究では、言語報告の難しい肢体不自由者に対する Microaggression の特徴を明らかにするために、相手や状況に応じて発話の有無を意図的に調整している肢体不自由者 A を対象に、彼女の発話抑制場面におけるかかわり手の行動を整理・分類した。その結果、かかわり手の行動の特徴を次の 3 つのカテゴリーに分類することができた。①マザリーズ等を用いた対人距離の不適切な行動、②時間的余裕を与えない代行・進行、③抵抗できない相手への身体接触を伴った行動である。先行研究では、健常者の差別的行動の背景要因を態度やステレオタイプといった個人要因から捉えていた。しかしながら、差別的行動をなくすためには、個人要因だけでなく、状況の力といった異なる視点からも検討する必要性が示唆された。

Ⅰ．問題と目的

我が国においては、障害者権利条約の批准（2014）や障害者差別解消法の施行（2016）等、共生社会実現に向けた整備が進められており、公には差別はなくなってきているように見える。しかしながら、日常場面においては障害者に対する差別や偏見は存在しており、健常者は無意識的に差別を行っていることが報告されている（内閣府, 2012）。現代の社会において、明らかな差別や偏見を障害者に向けることは社会的に認められず、隠される傾向にある（Krahé & Altwasser, 2006）。そのため、現代の差別は見えにくくなっている（栗田, 2015）。

そのような中、近年、日常場面における差別を広く捉える Microaggression という概念が注目を浴びている。Microaggression とは、「日々の言語的、非言語的、環境的な軽蔑、冷遇、侮蔑であり、意図的かどうかにかかわらず、ただ周縁化されたグループのメンバーであるということだけで、対象となる人々に対して敵対的、中傷的、否定的なメッセージを送ること（Sue, 2010）」と定義される。Sue, Capodilupo, Torino et. al. (2007) は人種差別に焦点を当て、Microaggression を Microassaults、Microinsults、Microinvalidations の 3 つのカテゴリーに分類した。Microassaults とは、対象に対する明らかな軽蔑や攻撃であり、蔑称で呼ぶ、避ける、意識的な差別的行動が含まれる。Microinsults は無礼で無神経で相手の地位やアイデンティティを貶める言動を指し、しばしば無意識的に行われる。例えば、黒人に対する「どうやって就職したの？」という言葉には、意図的かどうかにかかわらず、「黒人には就職することが難しい」というようなネガティブな考え方が反映されていると考えられる。Microinvalidations は心理的な思考、感情、現実の経験を排除、否定、無効化する言動である。例えば、差別的経験に対して「気にしすぎ」等の発言を行うことにより、差別を受けた者の経験を否定・無効化し、差別はないかのようにみなすのである。Microaggression の概念は、差別を行った者に悪意があったかどうかにかかわらず、差別を受けた者がどう感じるか、どのようなメッセージを受け取るかが重視され、いじめやハラスメントに近い概念であると考えられる。行動の根拠や結果に気付いていない善意の人々によってしばしば行われる点において、伝統的な差別とは異なっている（Gonzales, Davidoff, DeLuca et. al., 2015）。

Microaggression 研究の多くは人種差別に関するものだが、近年では障害者を対象とした研究も行われている。例えば、Keller & Galgay (2010) は身体障害者を対象に半構造化面接を行い、彼らが受けている障害に関する差別的経験について報告した。身体障害者は、アイデンティティの否定（個人ではなく障害に目を向けられる、障害に関する差別的経験を否定・最小化される）、プライバシーの否定、無力であると判断される、二次利得、保護対象化（子ども扱いをされる）、二級市民（劣った集団・人間として存在を脅かされる）、非性化（性的対象として見られない）といった Microaggression を経験していた（Keller & Galgay, 2010）。

Gonzales, Davidoff, Nadal et.al. (2015) は精神障害者を対象に会話分析を行い、精神障害者が受けている Microaggression について報告した。彼らは、無効化（差別的経験の最小化、症状化、保護対象化）、劣っているとの仮定（知能が低い・無能と判断される、行為主体性の否定）、精神障害への恐れ（危険、汚染）、精神障害は恥ずかしいと思われる、二級市民、明らかな差別の経験（退院後に仕事が無い）、Microaggression を受けたことによるネガティブな結果（フラストレーションを感じる、低い自尊心、疎外感）について報告した（Gonzales, Davidoff, Nadal et. al, 2015）。

これらの知見は、差別を受けている当事者達が日常場面において健常者のどのような行動

に対して不快感を覚えているのかを明らかにしているものの、対象者が差別的行動に対して不快感をもつことができ、かつ、それを言語報告できる者に限られるという課題がある。また、身体障害者を対象とした Keller & Galgay (2010) の研究においては、対象者の中に肢体不自由者や感覚障害者等が含まれており、障害種が多様である。障害者を対象とした態度研究においては、障害種によって健常者の態度が異なる（河内, 2004）ことや、障害が可視的な障害者に対する態度の方が不可視的な障害者に対する態度よりもネガティブ（Stone & Wright, 2012）であることが報告されている。上述の身体障害者と精神障害者を対象とした Microaggression 研究を比較しても、障害種によって差別的経験の特徴には異なる部分もある。これらのことから、障害種ごとに検討する必要があると考えられる。

肢体不自由者の多くは、日常生活動作に何らかの介助を必要としている。障害の状態によっては長期にわたる介助が必要であり、かかわり手との関係性等を考えて、不適切な行動を受けたとしても諦めざるを得ない場合が多いと考えられる。また、障害による表情や反応の乏しさから、かかわり手が意思を読み取ることが難しい者も存在する。かかわり手の側も、肢体不自由者からの意思表示を読み取ることができないために、自身の行為が不適切であると気付きにくくなっている可能性がある。以上のように、肢体不自由者に対する差別的行動の問題は潜在化しやすい傾向にあると考えられる。

筆者らは、相手や状況に応じて発話の有無を意図的に調整する肢体不自由者 A と継続的にかかわってきた。A はかかわり手から自身にとって不適切な行動を受けると発話を抑制する。A 自身も、発話の調整について認めている。これまでの観察から、A の発話の抑制にはかかわり手との関係性や接触回数は影響しないことが確認されている。A の発話抑制場面におけるかかわり手の行動を観察することで、これまで明らかにされてこなかった言語報告の難しい肢体不自由者に対する Microaggression を明らかにしうると考えられる。本研究では、A の発話抑制場面におけるかかわり手の行動を整理・分析することを通して、言語報告の難しい肢体不自由者に対する Microaggression の特徴を明らかにすることを目的とする。

Ⅱ．方法

1. 対象者

対象は、19 歳の女性 A である。脳性麻痺による四肢体幹機能障害と診断されており、身体障害者手帳 1 級を所有している。出生時体重 1714g、身長 42.0cm であった。生後 2 日目に低酸素脳症となり、生後 20 日間は人工呼吸管理状態であった。発話を始めたのは 2 歳頃で、初めは喃語のような言葉だった。母親が喃語に対して返事をしていると、徐々に言葉を話すようになっていった。2 歳から 6 歳までは療育センターに通い、その後は小学校の特別支援学級（肢体不自由学級）に通った。小学校卒業後、肢体不自由特別支援学校中学部に入学した。現在は特別支援学校を卒業し、福祉施設に通っている。15 歳 11 か月時に実施された遠城寺式乳幼児分析的発達検査の結果は、移動運動 6 か月 - 7 か月、手の運動 11 か月 - 1 歳 0 か月、基本的習慣 1 歳 4 か月 - 1 歳 6 か月、対人関係 3 歳 4 か月 - 3 歳 8 か月、発語 3 歳 4 か月 - 3 歳 8 か月、言語理解 4 歳 4 か月 - 4 歳 8 か月であった（河合, 2012）。知能検査は、検査器具や図版を注視することが難しいため実施することができなかった。なお、研究の実施に際してはインフォームド・コンセントが行われ、保護者の同意と了承が得られている。

2. 観察と分析の方法

2013 年 3 月から、月に 1 回 2 時間程度の観察を行った。場所は、自宅、特別支援学校、福祉施設、大学、大型スーパー等であった。A の発話の有無やかかわり手の行動に着目して観察を行った。観察終了後、その日のうちに筆記にて記録を行った。分析は、2013 年 3 月から 2015 年 10 月までの 27 回分の観察記録を対象とした。観察記録の中から発話抑制場面を抽出し、かかわり手の行動を整理・分類した。

Ⅲ. 結果

A の発話抑制場面におけるかかわり手の行動は、次の 3 つに分類することができた。①マザリーズ等を用いた対人距離の不適切な行動、②時間的余裕を与えない代行・進行、③抵抗できない相手への身体接触を伴った行動である。各々の代表的なエピソードを表 1 にまとめた。①の代表例については、会話内容を表 2 に示した。

①マザリーズ等を用いた対人距離の不適切な行動の代表例は、A とは面識のない女性が、突然 A の愛称を用いて親しげに話しかけてきた時の場面である。女性は車椅子に座る A と視線を合わせるように接近して覗き込み、マザリーズと捉えうる高い声と抑揚を強調した話し方をした。A は発話せず無言の状態が続いたため、介助者が代わりに返事をした。女性は介助者に A のことを一通り尋ねると、視線をそらせていた A と再び視線を合わせるようにして覗き込み、声をかけた。この他にも、マザリーズや幼児向けの大きな動作や誇張された表情を伴った行動をするかかわり手が存在した。例えば、A が特別支援学校で教室を移動していた時のことである。離れた場所にいた教員が A を視認すると、頭上で大きく手を振りながら A の名前を呼んだ。A が教員の方に顔を向けると、教員は両手を顔の近くで振りながら走り寄り、視線を合わせるようにしてしゃがみこんだ。A が視線をそらせると、回り込んで再び視線を合わせるように顔を近付けた。終始、マザリーズと捉えうる高くて大きな声で、抑揚を強調させながら話していた。また、かかわり手が不適切な対人距離でかかわる場面があった。施設にて、A が車椅子に座って食事をしていた時のことである。突然、面識のない男性が車椅子後方から顔を出し、A に顔を近付けながら挨拶した。A は身体に緊張が入り、机に両腕をぶつけていた。

②時間的余裕を与えない代行・進行の代表例は、A がイベントに参加した時の場面である。イベント司会者の女性は、参加者一人ひとりの名前を呼ぶので返事をするように声をかけた。A の名前が呼ばれ、A は手を挙げようとしていたが、麻痺のために時間がかかっていた。すると、司会者の女性は挙手を待たずに次の参加者の名前を呼んだ。この他にも、時間的余裕を与えることなく代行する場面があった。特別支援学校の文化祭で、A が商品販売をしていた時のことである。レジにて A が商品のバーコードを読み取ろうと機械を持ち上げたが、麻痺のために時間がかかっていた。教員は機械を持っている A の手を上から掴み、バーコードの読み取りを始めた。A の身体からは力が抜け、車椅子にもたれながらぼんやりとした表情でされるがままになっていた。

③抵抗できない相手への身体接触を伴った行動の代表例は、A が通う福祉施設での研修会に参加した時の場面である。母親が A を布団の上に寝かせると、突然面識のない男性が A の身体を触り始めた。A に対する挨拶や身体に触ることの承諾を得るような働きかけは一切見られなかった。男性は母親に A の身体の緊張の緩め方を説明し始め、その後、周囲に集まっ

た他の参加者にも A の身体を使って改めて説明を始めた。説明終了後に母親が尋ねるまで、男性が研修会の講師であることは A には知らされなかった。母親が A に「A ちゃん、この人誰って顔をしているね。」と声をかけると、男性は「あぁ、ごめんね。」と言って A の頬や額を触り、その場を去った。この他にも、A の食事介助をしていた女性が、A の口の中にまだ食べ物が残っているにもかかわらず、口の中に食べ物を押し込む様子が観察された。女性は時間内に食事を終わらせることを気にしており、A の口の中に次々と食べ物を運んでいた。

表 1　Microaggression のカテゴリーとその代表例

カテゴリー	例（エピソード）
①マザリーズ等を用いた対人距離の不適切な行動	A とは面識のない女性が「A ちゃん」と突然話しかけてきた。車椅子に乗っている A と視線を合わせようと接近して覗き込み、マザリーズと捉えうる発話を続けた。A は女性を見上げていた。女性は参加したイベントのスタッフで、「今日は楽しみだね、何がしたい？」と A に尋ねた。A は女性をじっと見るが発話はしなかった。無言の状態が続き、介助者が代わりに返事をした。スタッフの女性は A が教員等に対して発話を控えることを事前に知っている様子で「本当に喋らないんだね。」等と A について介助者に一通り尋ね、再び A を覗き込むように接近して声をかけた。
②時間的余裕を与えない代行・進行	イベントの参加者（多くは特別支援学校の生徒）を集め、説明が始まった。司会者の女性は、参加者一人ひとりの名前を呼ぶので返事をするよう声をかけた。参加者は多く、最初はぼんやりとした表情を浮かべていた A は、自分の順番が近付いてくると笑顔を浮かべるようになった。介助者が A に「もうすぐだね、手を挙げる？」と尋ねると、A は笑顔で右手をゆっくり動かし始めた。司会者の女性に名前を呼ばれ、A は手を挙げようとしていたが、麻痺のため時間がかかっていた。すると、司会者の女性は A の挙手を待たずに次の参加者の名前を呼んだ。A の顔からは笑みが消えて無表情となり、正面に保持していた顔を横に向けた。
③抵抗できない相手への身体接触を伴う行動	施設にて、母親が A を布団の上に寝かせると、面識のない男性が A の身体を突然触り始めた。母親が A の姿勢を整えようとすると男性は「そうじゃない」と制止した。男性は母親に A の身体の緊張の緩め方を説明し始めた。研修に来ていた人々も周囲に集まり始め、約 10 名の大人が A を取り囲んだ。男性は改めて周囲の人々にも施術方法を実演して見せた。A はとても強張った表情で、眼球が左右に揺れていた。男性が一通り説明を終えたタイミングで、母親が「もしかして今日の先生ですか？」と尋ねると「そうです」と答えた。母親は「誰かと思いました」と言い、A に「A ちゃん、この人誰って顔しているね」と声をかけた。

表 2　スタッフと A の会話

スタッフ		A
「A ちゃんだよね？」	→	スタッフの方を見る。
「今日は楽しみだね。何したい？」	↔	スタッフから視線を外さない。
ゆっくりとした口調で繰り返す。	↔	反応しない。
（無言の状態になる。）		（介助者「いろいろ食べたいみたいです。」）
介助者に A について質問する。 （「本当に喋らないんだね。」等）		顔を横に向けてスタッフから視線を外す。 （介助者が回答する。）
「またね。」	→	顔を背けたままうなずく。

Ⅳ．考察

本研究では、相手や状況に応じて発話の有無を意図的に調整する肢体不自由者 A を対象に、言語報告の難しい肢体不自由者に対する Microaggression の特徴を明らかにすることを目的として、A の発話抑制場面におけるかかわり手の行動を整理・分類した。その結果、かかわり手の行動の特徴を 3 つのカテゴリーに分類することができた。①マザリーズ等を用いた対人距離の不適切な行動、②時間的余裕を与えない代行・進行、③抵抗できない相手への身体接触を伴った行動であった。障害者に対する Microaggression 研究が乏しいため、以下では、態度、ステレオタイプ、コミュニケーション等の知見も用いながら、健常者の差別的行動の背景要因について検討を行う。

①マザリーズ等を用いた対人距離の不適切な行動については、Microaggression 研究の「保護対象化」と一致していると考えられる。従来、障害者に対する子ども扱いは、態度やステレオタイプ、コミュニケーション等の研究においても、健常者の不適切な行動として問題視されてきた。例えば、マザリーズの使用（Gouvier, Coon, Todd et. al., 1994）や単語の多用・強調（Liesener & Mills, 1999）といった言語行動が報告されている。これらの行動には、健常者のネガティブな態度や、「依存的」「管理欠如」「無能」といったステレオタイプがあらわれていると考えられている（Ryan, Bajorek, Beaman et. al., 1995）。本事例においても、かかわり手はマザリーズと捉えうる発話を行っており、19 歳という対象者の年齢にはそぐわないものである。対象者も後日、かかわり手に対して不快感を示す発言を行っている。しかしながら、かかわり手の女性は自身の捉えうる事柄から対象者の発達検査で示された発達段階をほぼ的確に捉え、それに応じたかかわりをしていたとも言える。対象者から捉えを修正するような働きかけがなかったために、かかわり手は自身の行動を不適切であると認識できず、行動を強化したと考えられる（表 2 参照）。本研究の結果は、健常者の悪意なき行動に対して肢体不自由者が反応しない、あるいはできない場合、健常者が自身の行動を不適切であると認識できず、その行動が助長されてしまう可能性を示している。ただし、マザリーズや表情・動作の誇張には、自身の言葉や感情を相手にわかりやすく伝える働きがある。肢体不自由者の中には、障害特性や知的な遅れから、そうした言動の方がコミュニケーションを円滑にとることのできる者もいるため、一概に不適切であるとは言い難い。肢体不自由者とかかわる

際には、ステレオタイプ的に判断するのではなく、相手がどのような言動を求めているのかを推し量りながらコミュニケーションをとる必要があるだろう。

②時間的余裕を与えない代行・進行については、Microaggression 研究の「無力との判断」と関連があると考えられる。また、コミュニケーションに関する研究では、健常者が直接障害者と話さずに代わりに介助者と話す（オストハイダ, 2005）等の回避的な行動が報告されている。上述の子ども扱い同様、ネガティブな態度やステレオタイプが影響していると考えられている（山下, 2000）。肢体不自由者の中には、障害のために動作が緩慢な者もいる。そのため、能力を低く評価されたり、「できない」と判断されてしまったりされやすいと考えられる。本事例においては、時間的余裕を与えれば十分可能な動作であったにもかかわらず、かかわり手による代行・進行が行われていた。しかしながら、かかわり手の行動からは、従来の知見で問題視されているような悪意や差別心等は感じられず、むしろ善意による行動であったとも考えられる。介助の必要な肢体不自由者の場合、かかわり手は気付かないうちに当事者のできることまで支援してしまっている可能性が考えられる。過剰な支援に対して、障害者が不快感を覚えている場合もある（Keller & Galgay, 2010）。今後は、かかわる相手に応じてどのような支援が必要であるのかを、当事者の意思を尊重しながら改めて考えていく必要があるだろう。

③抵抗できない相手に対する身体接触を伴う行動については、関連する記述が当事者の著書や介助者へのインタビュー等に散見される。大野（2012）は自身の体験を記した著書の中で、検査や触診などの医療行為を重ねるうちに、自身の身体を医療者に晒すことや、接触の抵抗を意識的に消し去ったと述べている。医療従事者と患者という関係性の中で、必要かつ適切な医療を得るために、自身の意識変革をせざるを得ない状況だったと考えられる。本事例においては、抵抗することが難しく、我慢せざるを得ない状況でありながら、本人と家族以外、取り囲んでいた多くの人々は違和感すら覚えていなかった。本来、男性が女性の身体を突然触るという行為は不適切であり、通常であれば誰かが止めに入るだろう。しかしながら、この場においては誰も何も言わなかった。すなわち、研修会という場においては、不適切な行動を不適切であると認識できない、あるいは認識できても止める等の行動に移すことができないという状況の力が働いていたと考えられる。肢体不自由者の多くは幼い頃から長期にわたる介助を受けているため、不快感をもつことすらできない者もいる可能性があると考えられる。本研究では発話抑制という形で当事者の不快感を捉えることができたが、上述のような意識の常態化した肢体不自由者については、不快感を捉えることが難しく、問題視されずに放置されてしまう可能性が高い。今後は、なぜ肢体不自由者が反応しなくなってしまったのかという点についても、注意を向ける必要があるだろう。

健常者の差別的行動を捉える従来の枠組みにおいては、背景要因として、態度やステレオタイプといった健常者の個人要因に注目されることが多かった。そのため、健常者の態度変容やステレオタイプ抑制の方略についての検討が重ねられている（例えば、Krahé & Altwasser, 2006）。しかしながら、本研究で示されたかかわり手の行動は、態度やステレオタイプを好転させるような従来の方法だけでは抑制することは難しいと考えられる。今後は健常者の差別的行動を抑制するために、状況の力等の従来とは異なる視点からも検討を進める必要があるだろう。

文献

1) Gonzales L, Davidoff KC, DeLuca TP & Yanos PT(2015) The mental illness microaggressions scale-perpetrator version (MIMS-P):Reliability and validity. *Psychiatry Research*, 229, 120-125.
2) Gonzales L, Davidoff KC, Nadal KL & Yanos PT(2015) Microaggressions experienced by persons with mental illnesses:An exploratory study. *Psychiatric Rehabilitation Journal*, 38, 234-241.
3) Gouvier D, Coon RC, Todd ME & Fuller KH(1994) Verbal interactions with individuals presenting with and without physical disability. *Rehabilitation psychology*, 39, 263-268.
4) 河合英美(2012) 特別支援学校において緘黙がみられる一事例の発話阻害要因に関する実証的検討. 三重大学卒業論文.
5) 河内清彦(2004) 障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件, 対人場面及び個人的要因の影響. 教育心理学研究, 52, 437-447.
6) Keller RM & Galgay CE(2010) Microaggressive Experiences of People with Disabilities. Sue DW(Ed.), Microaggressions and Marginality:Manifestation, Dynamics, and impact. Hoboken, 241-267.
7) 栗田季佳(2015) 見えない偏見の科学―心に潜む障害者への偏見を可視化する―. 京都大学学術出版会.
8) Krahé B & Altwasser C(2006) Changing negative attitudes towards persons with physical disabilities:An experimental intervention. *Journal of Community & Applied Social Psychology*, 16, 59-69.
9) Liesener JJ & Mills J(1999) An experimental study of disability spread:Talking to an adult in a wheelchair like a child. *Journal of applied social psychology*, 29, 2083-2092.
10) 内閣府(2012) 障害者に関する世論調査. http://survey.gov-online.go.jp/h24/h24-shougai/index.html
11) 大野更紗(2012) 困ってるひと. ポプラ社.
12) オストハイダ・テーヤ(2005) “聞いたのはこちらなのに…” ―外国人と身体障害者に対する「第三者返答」をめぐって―. 社会言語科学, 7, 39-49.
13) Ryan EB, Bajorek S, Beaman A & Anas AP(2005) “I just want you know that ‘them’ is me”:intergroup perspectives on communication and disability. Harwood J & Giles H(Ed.), Intergroup communication:Multiple perspectives. Peter Lang Publishing Group, 117-137.
14) Stone A & Wright T(2012) Evaluations of people depicted with facial disfigurement compared to those with mobility impairment. *Basic and Applied Social Psychology*, 34, 212-225.
15) Sue DW, Capodilupo CM, Torino GC, Bucceri JM, Holder AMB, Nadal KL et.al.(2007) Racial Microaggressions in everyday life:Implications for clinical practice. *American Psychological Association*, 62, 271-286.

16) Sue DW(2010) Microaggressions, Marginality, and Oppression. Hoboken.
17) 山下幸子(2000) 障害者と健常者の関係から見えてくるもの―障害者役割についての考察から―. 社会問題研究, 50, 95-115.

Journal of Inclusive Education
Asian Society of HUMAN SERVICES

- Editorial Board -

Editor-in-Chief	Atsushi TANAKA	University of the Ryukyus (Japan)
Executive Editor	Changwan HAN	University of the Ryukyus (Japan)

Aiko KOHARA
University of the Ryukyus (Japan)

Aoko CHINA
National Institute of Vocational Rehabilitation (Japan)

Eonji KIM
Hanshin PlusCare Counselling Center (Korea)

Haejin KWON
Ritsumeikan University (Japan)

Hideyuki OKUZUMI
Tokyo Gakugei University (Japan)

Iwao KOBAYASHI
Tokyo Gakugei University (Japan)

Kazuhito NOGUCHI
Tohoku University (Japan)

Keita SUZUKI
Kochi University (Japan)

Kenji WATANABE
Kio University (Japan)

Kohei MORI
Kanda-Higashi Clinic, MPS Center (Japan)

Liting CHEN
Sophia School of Social Welfare (Japan)

Mika KATAOKA
Kagoshima University (Japan)

Mikio HIRANO
Tohoku Bunka Gakuen University (Japan)

Nagako KASHIKI
Ehime University (Japan)

Shogo HIRATA
Ibaraki Christian University (Japan)

Takahito MASUDA
Hirosaki University (Japan)

Takashi NAKAMURA
University of Teacher Education Fukuoka (Japan)

Takeshi YASHIMA
Joetsu University of Education (Japan)

Tomio HOSOBUCHI
Saitama University (Japan)

Toru HOSOKAWA
Tohoku University (Japan)

Toshihiko KIKUCHI
Mie University (Japan)

Yoshifumi IKEDA
Joetsu University of Education (Japan)

Editorial Staff

- Editorial Assistants	Mamiko OTA	University of the Ryukyus (Japan)
	Sakurako YONEMIZU	Asian Society of Human Services

Journal of Inclusive Education
VOL.2 March 2017
© 2017 Asian Society of Human Services
Editor-in-Chief Atsushi TANAKA

Presidents Masahiro KOHZUKI・Sunwoo LEE

Publisher Asian Society of Human Services
Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Production Asian Society of Human Services Press
Faculty of Education, University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa, Japan
FAX: +81-098-895-8420 E-mail: ashs201091@gmail.com

Journal of Inclusive Education
VOL.2 March 2017

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

Verification of the Reliability and Validity to CRATIE
(Cooperative Relationship Assessment Tool for Inclusive Education).....**Haruna TERUYA**, et al. 1

An Attempt of the Education Course for Improving Pupils' QOL
through the Interfaculty Collaboration in Special Needs Schools and its Results;
A Preliminary Consideration on the Results of the Practice of Cooperation Time
by Using Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT).....**Atsushi TANAKA**, et al. 8

Relationship between Psychological Evaluation and Physiology and Pathology on
Educational Outcomes of Physically Handicapped and Invalid Children.....**Minji KIM**, et al. 21

REVIEW ARTICLES

Current Situation and Issue in Early Detection and Early Support for Children with
Developmental Disabilities in 5-year-old Health Examination.....**Ryotaro SAITO**. 29

Cognitive Function Related to Educational Support for Children with Developmental Disabilities:
Visuospatial Working Memory in Children with LD, ADHD and ASD.....**Yuhei OI**, et al. 38

SHORT PAPER

Microaggression Experienced by Individual with Physical Disability: A Case Study.....**Reiko FUJIMURA**. 47

PRACTICAL REPORT

The Study of Effective Training of English for Children with Specific Difficulties of Learning
.....**Sayano KAMIOKA**. 56

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan